

情報処理学会東北支部 平成30年度 支部報告会

日時：平成30年6月20日（水） 12:30-14:00

場所：東北大学工学部電子情報システム・応物系 1号館2階 大会議室

住所：〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉6-6-05

I. 開会

II. 支部長挨拶

III. 報告

1. 表彰

- (a) 平成29年度 東北支部学生奨励賞の選考結果報告（資料1）
- (b) 平成29年度 東北支部奨励賞の選考結果報告（資料2）
- (c) 第13回 東北支部野口研究奨励賞の選考結果報告（資料3）
- (d) 平成29年度 東北支部学生奨励賞 贈呈
- (e) 平成29年度 東北支部奨励賞 贈呈
- (f) 第13回 東北支部野口研究奨励賞 贈呈

2. 報告事項

- (a) 平成29年度 活動報告（資料4）
- (b) 平成29年度 決算（資料5）
- (c) 平成30年度 運営委員（資料6, 資料7, 資料8）
- (d) 平成30年度 活動計画（資料9, 資料10）
- (e) 平成30年度 予算（資料11）

3. 学会概況報告（資料12, 資料13）

4. その他（資料14）

IV. 閉会

平成29年度 情報処理学会東北支部 学生奨励賞

(「情報処理学会東北支部学生奨励賞に関する要項」より)

趣旨 東北地方の情報処理分野を教える主要大学と主要高専の卒業生の成績優秀者各1名に対し、「学生奨励賞」を授与し、情報処理分野を学ぶ東北地区の学生が、より一層、情報処理分野の勉学に勤しむように奨励するものである。

対象 表彰の対象者は、次のとおりとする。

- (1) 情報関連の教育・研究活動を行っている学科(以下、情報関連学科)を持つ大学または高専の卒業年度生で、成績優秀な学生。
- (2) 大学にあっては、修士課程への進学予定者であること。高専にあっては、専攻科への進学、他大学への編入学、他大学院の修士課程への進学予定者であること。
- (3) 情報処理学会学生会員、もしくは入会を希望しているものであること。
- (4) 原則として、電子情報通信学会東北支部における同奨励賞の候補者は対象外とする。

選考

- (1) 本奨励賞に賛同する大学・高専の情報関連学科は、成績優秀で意欲的な学生1名を推薦する。推薦の基準は各学科に一任する。
- (2) 支部長が支部運営委員から任命する「学生奨励賞選考委員会」を設置し、支部長が委員長となり、受賞者の選考を行う。
- (3) 受賞者は、原則として毎年度15名程度とする。

情報処理関連学科を持つ大学・高専15校に成績優秀者の推薦を依頼したところ、15名の推薦があった。選考委員会においてメール審議を行い、推薦のあった下記15名への学生奨励賞の授与を決定した。

秋元 恭太	弘前大学 理工学部 電子情報工学科
木村 泰嗣	八戸工業大学 工学部 システム情報工学科
* 新井 達也	秋田大学 理工学部数理・電気電子情報学科
伊藤 俊輔	秋田県立大学 システム科学技術学部 電子情報システム学科
渡部 雅博	岩手大学 工学部 電気電子・情報システム工学科
渡辺 紀文	岩手県立大学ソフトウェア情報学部
早坂 美咲	山形大学 工学部 情報科学科
* 田上 翼	東北大学 工学部 電気情報物理工学科
銭谷 英李	東北工業大学 工学部 情報通信工学科
繁泉 宥斗	東北学院大学 工学部 電気情報工学科
小松 秀生	仙台高等専門学校 専攻科情報電子システム工学専攻
川窪 涼介	会津大学 コンピュータ理工学部 コンピュータ理工学科
佐々木 駿斗	日本大学 工学部 情報工学科
川和 耀太	福島大学 理工学群 共生システム理工学類
日下部 太星	鶴岡工業高等専門学校 制御情報工学科

*の2名については、6/20の支部報告会で贈呈予定。他の13名については、各校で贈呈済み。

平成29年度 情報処理学会東北支部奨励賞

(「情報処理学会東北支部表彰規定」より)

趣旨 (第3条) 奨励賞は、情報処理に関する学問、技術の奨励のため、有為と認められる新進の科学者または技術者に贈呈する。

対象 (第4条) 奨励賞を受ける者は、支部主催の電気関係学会東北支部連合大会(以下、支部連合大会と呼ぶ)および研究会に発表した者で、次の各号に該当するものから選考する。

1. 原則として本学会東北支部会員であること。(手続き中のものを含む)
2. 講演の時期において大学の学部卒業後10年未満の者またはこれと同等と認められる者であること。
3. 講演者として登録し、かつ講演を全て行った者であること。
4. 本奨励賞および類似の学会賞を受けたことのない者であること。
5. 対象となる発表は、表彰の時期の前年4月から当該年の3月までに 行われたものとする。

(第6条) 奨励賞は、原則として支部連合大会から3編以内、研究会から2編以内とする。

表彰 (第10条) 表彰の受領者は、選考委員長の報告に基づき支部運営委員会で決定する。

平成29年8月24、25日に開催された平成29年度電気関係学会東北支部連合大会から10件、平成29年4月～平成30年3月に開催された研究会(計7回)から6件の推薦があった。選考委員会により推薦論文の査読を行い、その結果をもとに平成30年5月18日開催の選考委員会で下記の受賞候補者を決定した。

候補者(支部連合大会)

1. 遠藤 空(東北大学)
“数論変換に基づく秘匿計算向け暗号の高効率実装”
2. 淀川 滉也(東北大学)
“プローブ・カメラシステムを用いた3次元超音波像の再構成に関する検討”
3. 齋藤 雄二(東北大学)
“MEMS気圧センサを用いたインフラサウンド收音用マイクロフォンの試作”

候補者(研究会)

4. 佐藤 佑樹(東北学院大学)
“ニューラルネットワークを用いた音楽データの楽器分類手法,” 第4回情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学)
5. 宇佐美 智之(山形大学)
“電池残量の高残量化・均一化を目指したDTNルーティングプロトコル,” 第7回情報処理学会東北支部研究会(山形大学)

- 支部運営委員によるメール審議(5/21)で候補者への授賞を承認。
- 4.については支部推薦論文として申請。

第13回 野口研究奨励賞

(「情報処理学会東北支部野口研究奨励賞に関する要項」より)

趣旨 我が国を代表する情報処理分野のパイオニアであり、東北地方の当分野の発展に多大に貢献された野口正一先生（東北支部第7代支部長，本会第18代会長）から寄贈された資金により設立された本賞は，優秀な学術論文を出版した東北支部会員の若手研究者を表彰し，より一層の情報処理分野に関する研究開発を奨励するものである。

対象 表彰の対象者は，次のとおりとする。

- (1) 本学会東北支部会員（正会員または学生会員，手続き中のものを含む）であること。
- (2) 過去5年程度以内において，情報処理分野に関連する学術雑誌・国際会議予稿集に掲載された論文の主要な著者であること。ただし，第一著者であるかどうかは問わない。
- (3) 応募時において35歳以下の若手研究者であること。
- (4) 受賞者以外の共著者は表彰の対象としない。

選考 受賞者の選考方法は，次に定めるところによる。

- (1) 支部長が支部運営委員から任命する「野口研究奨励賞選考委員会」を設置し，支部長が委員長となり，受賞者の選考を行う。
- (2) 選考委員長の報告に基づき支部運営委員会で決定する。
- (3) 受賞者は，原則として毎年度につき1名とする。

2件の応募があり，平成30年5月18日に開催された選考委員会で慎重に審議した結果，以下の受賞候補者を決定した。

候補者

Diptarama Hendrian（東北大学大学院情報科学研究科・助教）

対象論文

Diptarama, Ryo Yoshinaka, and Ayumi Shinohara, “AC-Automaton Update Algorithm for Semi-dynamic Dictionary Matching,” Proc. of 23rd International Symposium on String Processing and Information Retrieval (LNCS 9954), pp.110-121 (2016).

- 支部運営委員によるメール審議（5/21）で候補者への授賞を承認。

第13回(平成29年度)野口研究奨励賞

受賞者



Diptarama Hendrian(ディプタラマ ヘンリアン)

東北大学 大学院 情報科学研究科

[研究の概要]

辞書照合(dictionary matching)とは、辞書(dictionary)と呼ばれるパターンの集合とテキストが入力として与えられたときに、テキスト中にすべてのパターンの出現位置を求める問題である。辞書照合は文字列処理やデータマイニングにおいて重要な基盤技術である。例えば、いくつかのキーワードを辞書に登録しておき、そのキーワードを含んだ SNS の投稿をリアルタイムに検知することにも利用できる。1975 年に Aho&Corasick がオートマトン(AC オートマトンと呼ぶ)を用いた辞書照合を効率的に行ったアルゴリズムを開発した。

しかしながら、通常の辞書照合アルゴリズム用いると新たなパターンを追加するときに、データ構造を新たに構築し直さなければならないため、パターンの数が多い場合はこの再構築に長い時間がかかってしまう。そこで、データ構造をゼロから再構築するのではなく、必要最小限の手間でデータ構造更新するアルゴリズムが必要となる。

キーワードの追加に対応した AC オートマトンを更新するアルゴリズムは 1985 年に Mayer に示された。それ以降、様々な工夫がなされてきたが、既存のものは、最悪時には辞書をゼロから再構築する手間と変わらなかったり、逆に最悪時の再構築時間を短縮する代償として照合時間が遅くなったりという欠点を持っていた。本研究は、Aho-Corasick オートマトンの構造と、有向無閉路グラフ(DAWG)の構造の類似点や特徴を巧妙に利用して融合させることで、照合時間を高速に保ったままで、更新時間を必要最小限に抑えることに成功しており、その実行時間の解析も行っている。

[受賞の感想]

この度、野口研究奨励賞の受賞者にお選びいただき、誠にありがとうございます。このような賞を受賞できて、とても光栄に思っています。情報処理学会東北支部の皆様をはじめ、すべての関係者には深く感謝申し上げます。また本論の共著者でもあり、指導した頂いた篠原歩先生および吉仲亮先生に深く御礼申し上げます。今後も、情報科学・情報処理分野のますますの発展のために、研究を進んでいきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

情報処理学会東北支部 平成29年度 活動報告

1. 支部報告会

日時 平成29年6月7日（水）12:30～14:00

会場 東北大学 工学部電子情報システム・応物系1号館 大会議室

2. 委員会等

2.1. 情報処理学会東北支部 平成28年度 第1回 幹事会

日時 平成29年5月17日（水）15:00～17:00

会場 東北大学 電気通信研究所本館 中会議室

議題

1. 平成29年度支部運営委員改選について
2. 平成28年度支部奨励賞，支部学生奨励賞，第12回野口研究奨励賞について
3. 平成28年度活動報告について
4. 平成29年度活動計画について
5. 平成28年度決算について
6. 平成29年度予算について
7. その他

2.2. 情報処理学会東北支部 平成28年度 第1回 運営委員会

日時 平成29年5月23日（火）13:30～15:30

会場 東北大学 電気通信研究所本館 中会議室

議題

報告事項

1. 平成29年度支部運営委員改選の報告
2. 平成28年度支部長会議，平成28年度役員検討会の報告
3. 平成28年度支部学生奨励賞の報告

審議事項

1. 平成28年度支部奨励賞について
2. 第12回野口研究奨励賞について
3. 平成28年度活動報告について
4. 平成29年度活動計画について
5. 平成28年度決算について
6. 平成29年度予算について

その他

1. 支部報告会のご案内
2. 研究会・講演会の申込方法

3. 事業計画に基づく事業（行事，表彰等）

3.1. 平成 29 年度電気関係学会東北支部連合大会

日程 平成 29 年 8 月 24 日（木）～25 日（金）

会場 弘前大学 文京町地区キャンパス

発表件数 238 件（通常講演），4 件（依頼講演・特別講演）

参加者数 445 名

特別講演会

日時 平成 29 年 8 月 24 日（木）15:15～16:25

会場 弘前大学 創立 50 周年記念会館みちのくホール

講師 齋藤 三千政 氏（弘前医療福祉大学短期大学部 教授）

演題 いま、なぜ太宰文学か — その魅力に迫る —

電子情報通信学会創立 100 周年記念東北支部講演会

日時 平成 29 年 8 月 24 日（木）16:35～17:45

会場 弘前大学 創立 50 周年記念会館みちのくホール

講師 白鳥 則郎 氏（東北大学 名誉教授・中央大学研究開発機構 機構教授）

演題 人の暮らしと調和・止揚・共生する情報システム

— Towards Post-modern Information Systems —

3.2. 支部研究会（平成 29 年度は 7 回開催）

- 第 1 回情報処理学会東北支部研究会（共催：秋田大学大学院理工学研究科人間情報工学コース，理工学部人間情報工学コース）

日程 平成 29 年 11 月 30 日（木）～12 月 1 日（金）

会場 放送大学 秋田学習センター 講義室（秋田大学内）

発表件数 16 件

参加者数 63 名

- 第 2 回情報処理学会東北支部研究会（共催：八戸工業大学工学部システム情報工学科）

日程 平成 29 年 12 月 8 日（金）

会場 八戸工業大学 システム情報工学専門棟

発表件数 10 件

参加者数 24 名

- 第 3 回情報処理学会東北支部研究会（共催：岩手大学理工学部システム創成工学科）

日程 平成 29 年 12 月 16 日（土）

会場 岩手大学 理工学部 4 号館

発表件数 17 件

参加者数 34 名

- 第 4 回情報処理学会東北支部研究会

日程 平成 30 年 1 月 20 日（土）

会場 東北学院大学 泉キャンパス 2 号館

発表件数 13 件

参加者数 69 名

- 第 5 回情報処理学会東北支部研究会

日程 平成 30 年 2 月 10 日 (土)

会場 日本大学 工学部ハット NE

発表件数 10 件

参加者数 21 名

- 第 6 回情報処理学会東北支部研究会 (共催: 弘前大学理工学研究科電子情報工学科)

日程 平成 30 年 2 月 19 日 (月)

会場 弘前大学 理工学部第 1 号館

発表件数 23 件

参加者数 60 名

- 第 7 回情報処理学会東北支部研究会

日程 平成 30 年 3 月 9 日 (金)

会場 山形大学 工学部

発表件数 17 件

参加者数 45 名

3.3. 研究講演会 (平成 29 年度は 6 回開催)

- 情報処理学会東北支部特別講演会 (第 379 回研究講演会)

日程 平成 29 年 6 月 7 日 (水)

会場 東北大学 工学部電子情報システム・応物系 101 大講義室

講師 藤巻 秀明 氏 (富士通株式会社 サービスプラットフォーム戦略企画室 エグゼクティブアーキテクト / 大阪大学 サイバーメディアセンター 次世代クラウド協働研究所 副所長&招聘教授)

演題 コールドストレージ市場と最新技術動向

参加者数 200 名

- 第 380 回情報処理学会東北支部研究講演会

日程 平成 29 年 6 月 26 日 (月)

会場 会津大学 研究棟

講師 米陀 佳祐 先生 (金沢大学)

演題 最新の自動運転技術と公道実証実験の取り組みについて

参加者数 25 名

- 第 381 回情報処理学会東北支部研究講演会 (共催: 秋田大学大学院理工学研究科)

日程 平成 29 年 11 月 15 日 (水)

会場 秋田大学 理工学部 5 号館

講師 橋本 孝之 氏 (日本アイ・ビー・エム株式会社 名誉相談役)

演題 新産業革命と社会的インパクト —新たな時代におけるリーダーシップ—

参加者数 86 名

- **第 382 回情報処理学会東北支部研究講演会**（共催：弘前大学理工学部電子情報工学科）
 日程 平成 29 年 12 月 6 日（水）
 会場 弘前大学 理工学部 1 号館
 講師 湯浅 哲也 先生（山形大学）
 演題 新しい原理に基づく X 線 CT：乳がんの早期診断を目指して
 参加者数 58 名
- **第 383 回情報処理学会東北支部研究講演会**（共催：秋田大学大学院理工学研究科人間情報工学コース/理工学部人間情報工学コース）
 日程 平成 29 年 12 月 18 日（月）
 会場 秋田大学 理工学部 5 号館
 講師 阿部 新生 氏（株式会社ソフトクリエイティブホールディングス 取締役）
 演題 情報工学系学生のためのキャリアデザインを目的とした企業論
 参加者数 61 名
- **第 384 回情報処理学会東北支部研究講演会**
 日程 平成 30 年 1 月 5 日（金）
 会場 東北大学 情報科学研究科棟
 講師 Prof. Clément Valentin
 (Center for Climate Systems Modeling, ETH Zürich)
 演題 CLAW FORTRAN Compiler
 — achieve performance portability with source-to-source translation —
 参加者数 30 名

3.4. 表彰

- 3.4.1. 支部学生奨励賞
15 名を表彰（資料 1）
- 3.4.2. 支部奨励賞
5 名を表彰（資料 2）
- 3.4.3. 野口研究奨励賞
1 名を表彰（資料 3）

4. その他特記事項等

4.1. 後援・協賛（平成 29 年度は 10 件）

- 学都「仙台・宮城」サイエンスデイ 2017
 日程 平成 29 年 7 月 16 日（日）
 場所 東北大学川内北キャンパス講義棟
 主催 特定非営利活動法人 natural science
- 第 17 回夏休み子ども科学キャンパス，第 12 回秋休み子ども科学キャンパス
 日程 平成 29 年 7 月 25 日（火）～26 日（水），10 月 10 日（火）～11 日（水）
 場所 東北大学大学院工学研究科 創造工学センター
 主催 東北大学，仙台市，仙台市教育委員会

- **第24回たのしいサイエンス・サマースクール**
 日程 平成29年8月7日(月)～8日(火)
 場所 東北大学大学院工学研究科 創造工学センター「発明工房」
 主催 たのしい科学企画委員会
- **Entertainment Computing 2017**
 日程 平成29年9月16日(土)～18日(月)
 場所 東北大学 電気通信研究所
 主催 情報処理学会エンタテインメントコンピューティング研究会
- **IEEE WIE (Women in Engineering) キックオフイベント**
 (後援・広報のみ)
 日程 平成29年9月29日(金)
 場所 東北大学 電気通信研究所
 主催 IEEE Sendai WIE
- **東北大学電気通信研究所一般公開 2017**
 (後援・広報のみ)
 日程 平成29年10月7日(土)～8日(日)
 場所 東北大学 電気通信研究所
 主催 東北大学 電気通信研究所
- **CITP シンポジウム**
 日程 平成29年10月27日(金)
 場所 石巻専修大学
 主催 情報処理学会 CITP フォーラム
- **IEEE Sendai Section 講演会**
 (後援・広報のみ)
 日程 平成29年12月7日(木)
 場所 東北大学 電気通信研究所
 講師 久住 嘉和 氏(日本電信電話(株)研究企画部門プロデュース担当 担当部長)
 演題 NTTグループの農業×ICTの取り組みについて
 主催 IEEE Sendai Section
- **中学生のためのCGプログラミング講座 — 3Dゲームプログラミングを学ぼう —**
 (後援のみ)
 日程 平成29年12月26日(火)～27日(水)
 場所 東北大学 サイバーサイエンスセンター
 主催 東北大学 サイバーサイエンスセンター
- **平成30年東北地区若手研究者研究発表会**
 日程 平成30年2月24日(土)
 場所 東北学院大学 多賀城キャンパス
 主催 東北地区若手研究者研究発表会
 「音・光・電波・エネルギー・システムとその応用」

情報処理学会東北支部 平成29年度決算

収入	2017年度		決算－予算
	予算	決算	
本部からの繰入相当額	1,987,000	1,987,000	0
支部交付金相当額	1,987,000	1,987,000	0
記念事業支援金相当額	0	0	0
ジュニア会員向けイベント補助			0
事業収入	0	0	0
支部大会	0	0	0
講演会	0	0	0
研究会	0	0	0
連合大会	0	0	0
補助金収入	50,000	50,000	0
(財)仙台応用情報科学研究振興財団より寄付金	50,000	50,000	0
雑収入(利息等)	20	0	-20
当期収入合計(A)	2,037,020	2,037,000	-20

支出	2017年度		決算－予算
	予算	決算	
事業費	1,520,000	1,460,050	-59,950
支部表彰	350,000	326,498	-23,502
講演会	350,000	240,932	-109,068
研究会	360,000	256,900	-103,100
連合大会(分担金)	310,000	310,000	0
セミナー・会議支援	150,000	241,370	91,370
アウトリーチ活動	0	84,350	84,350
管理費	517,020	170,732	-346,288
評議員会・幹事会	170,000	82,732	-87,268
総会	90,000	59,200	-30,800
事務委託費	240,000	28,800	-211,200
雑費	17,020	0	-17,020
予備費等(任意)	0	0	0
当期支出合計(C)	2,037,020	1,630,782	-406,238
当期収支差額(A-C)	0	406,218	406,218

平成29年度 情報処理学会東北支部 運営委員 名簿

2017.4.1 現在

役職		氏名	前任者	所属	備考
支部長		菅沼 拓夫	大堀 淳	東北大学サイバーサイエンスセンター	
庶務幹事	新	島崎 聡	再任	富士通 (株) 東北支社	
		阿部 亨	北形 元	東北大学サイバーサイエンスセンター	
会計幹事		瀬沼 宏之	再任	日本電気 (株)東北支社	
	新	吉仲 亮	江川 隆輔	東北大学大学院情報科学研究科	
広報幹事	新	手塚 大	再任	(株) 日立ソリューションズ東日本	
		夏井 雅典	鈴木 健一	東北大学電気通信研究所	
支部委員		大堀 淳	小林 広明	東北大学電気通信研究所	前支部長枠
		北形 元	滝沢 寛之	東北大学電気通信研究所	前庶務幹事枠
	新	江川 隆輔	青木 輝勝	東北大学サイバーサイエンスセンター	前会計幹事枠
	新	関口 理恵	再任	NECソリューションイノベータ (株)	
		伊藤 政彦	再任	(株) NTTデータ東北	
		長瀬 智行	再任	弘前大学大学院理工学研究科	
	新	清水 能理	再任	八戸工業大学工学部	
		景山 陽一	再任	秋田大学大学院理工学研究科	
		猿田 和樹	再任	秋田県立大学システム科学技術学部	
	新	木村 彰男	再任	岩手大学理工学部	
		布川 博士	再任	岩手県立大学ソフトウェア情報学部	
	新	小坂 哲夫	再任	山形大学大学院理工学研究科	
		鈴木 健一	再任	東北工業大学工学部	
		岩谷 幸雄	再任	東北学院大学工学部	
	新	速水 健一	再任	仙台高等専門学校専攻科情報電子システム工学専攻	
		奥山 祐市	再任	会津大学コンピュータ理工学部	
	上田 清志	大山 勝徳	日本大学工学部		
	萩生田 善之	佐藤 恭史	(株) 富士通システムズ・イースト東北支社		
	富樫 敦	再任	宮城大学事業構想学部		

2018 情処総第 43 号

2018 年 3 月 7 日

東北支部
菅沼 拓夫 支部長殿

一般社団法人 情報処理学会 本部事務局

2018 年度支部運営委員改選結果について

拝啓 時下、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、本部役員・代表会員選挙と同時実施いたしました標記につきまして、集計が整いましたので、下記の通りご報告申し上げます。

敬具

記

選挙期間：2018年2月1日～2018年3月4日

A：投票用紙発送数 492件（1月現在会費納入済の正会員および名誉会員）

B：投票数 115票

C：投票率 [B/A] 23.4%

D：開票結果

役 職	候補者氏名	信任数
支部長	大町真一郎	107
庶務幹事	上野 雄大	108
会計幹事	瀬沼 宏之	108
広報幹事	松田 一孝	108

E：候補者以外の選定 なし

以 上

照会先

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-5 化学会館 4F 一般社団法人 情報処理学会 管理部門

TEL:03-3518-8374 FAX:03-3518-8375 E-mail:soumu@ipsj.or.jp

平成30年度 情報処理学会東北支部 運営委員 名簿

2018.4.1 現在

役職		氏名	前任者	所属	備考
支部長	新	大町 真一郎	菅沼 拓夫	東北大学大学院工学研究科	
庶務幹事		島崎 聡	再任	富士通（株）東北支社	
	新	原田 慶	島崎 聡	富士通（株）東北支社	任期途中交代予定
	新	上野 雄大	阿部 亨	東北大学電気通信研究所	
会計幹事	新	瀬沼 宏之	再任	日本電気（株）東北支社	
		吉仲 亮	江川 隆輔	東北大学大学院情報科学研究科	
広報幹事		手塚 大	再任	(株)日立ソリューションズ東日本	
	新	松田 一孝	夏井 雅典	東北大学大学院情報科学研究科	
支部委員	新	菅沼 拓夫	大堀 淳	東北大学サイバーサイエンスセンター	前支部長枠
	新	阿部 亨	北形 元	東北大学サイバーサイエンスセンター	前庶務幹事枠
		江川 隆輔	青木 輝勝	東北大学サイバーサイエンスセンター	前会計幹事枠
	新	高橋 好弘	関口 理恵	NECネットイノベーション（株）	任期途中交代
	新	伊藤 政彦	再任	(株)NTTデータ東北	
	新	長瀬 智行	再任	弘前大学大学院理工学研究科	
		清水 能理	再任	八戸工業大学工学部	
	新	景山 陽一	再任	秋田大学大学院理工学研究科	
	新	猿田 和樹	再任	秋田県立大学システム科学技術学部	
		木村 彰男	再任	岩手大学理工学部	
	新	布川 博士	再任	岩手県立大学ソフトウェア情報学部	
		小坂 哲夫	再任	山形大学大学院理工学研究科	
	新	鈴木 健一	再任	東北工業大学工学部	
	新	岩谷 幸雄	再任	東北学院大学工学部	
		速水 健一	再任	仙台高等専門学校専攻科情報電子システム工学専攻	
		奥山 祐市	再任	会津大学コンピュータ理工学部	任期延長
	新	関澤 俊弦	上田 清志	日本大学工学部	
新	萩生田 善之	再任	富士通（株）		
新	富樫 敦	再任	宮城大学事業構想学部		

(*) 幹事会メール審議で承認 2018年3月12日

情報処理学会東北支部 平成30年度 活動計画

1. 支部報告会

日時 平成30年6月20日（水）12:30～14:00

会場 東北大学 工学部電子情報システム・応物系1号館 大会議室

2. 委員会等

- 幹事会 1～2回程度開催予定
- 運営委員会 1～2回程度開催予定

3. 各種事業（行事，表彰等）

- 平成30年度電気関係学会東北支部連合大会

日程 平成30年9月6日（木）～7日（金）

会場 岩手大学 上田キャンパス 学生センター

- 支部研究会

8回程度開催予定

- 研究講演会

6回程度開催予定

- 情報処理学会東北支部特別講演会（第385回研究講演会）

日程 平成30年6月20日（水）

会場 東北大学工学部 電子情報システム・応物系101大講義室

講師 板屋 一嗣 氏（株式会社NTTデータ 技術革新統括本部技術開発本部
企画部 VISTECH 推進室 課長）

演題 技術革新が導くデジタル社会の将来展望

— NTT DATA Technology Foresight 2018 —

- 表彰

- 支部学生奨励賞

15名程度表彰予定

- 支部奨励賞

5名程度表彰予定

- 野口研究奨励賞

1名を表彰予定

4. 後援・協賛

- 学都「仙台・宮城」サイエンスデイ
- 夏休み子ども科学キャンパス，秋休み子ども科学キャンパス（承認済み）
- たのしいサイエンス・サマースクール
- 東北大学電気通信研究所一般公開（承認済み）
- 中学生のためのCGプログラミング講座
- 東北地区若手研究者研究発表会

2018「学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ



2018年7月15日(日) 9:00～16:00
 東北大学川内北キャンパス講義棟
仙台市青葉区川内 41 (ご来場の際は公共交通機関をご利用ください)



HOME > サイエンスデイ > サイエンスデイ2018

サイエンスデイ2018

開催趣旨

近年、我が国の科学技術研究および産業競争力の強化を実現する「科学技術創造立国」の基盤を揺るがす深刻な問題として、子どもたちの「理科離れ」が叫ばれています。「理科離れ」は単に「個人的に理科が嫌い」という問題ではなく、理科を学ぶ過程で本来養われるはずの「知的好奇心」や「論理的思考力」等の低下を意味しています。その結果として、文理問わず高等教育を理解できない学生が増大し、大学教育の質の維持が著しく困難に陥っているというかたちで問題は顕在化しており、もはや「理科離れ」問題は、国民全体による知の問題、すなわち社会的リスクであると捉えられています。

これらの社会的背景に、社会の細分化・複雑化に伴い、個々は専門家に任せ、表面だけを利用するブラックボックス化が進んだことがあります。その結果、わたしたちは効率性と引き換えに、本来そこにあるはずの自己と対象との関係性を実感することが困難な状況に陥っています。しかしながら本来、自己と対象との関係性の集積が、すなわち社会です。この自己と対象との関係性が見えない危機こそが、個人・地域社会・国レベルでの問題の本質的な原因とnatural science では捉え、そこから解決策を見出していきます。

自己と対象との関係性を実感しやすい範囲として、natural science は社会の中でも特に“地域”に着目します。自分が社会に与えている影響と自分が社会から受けている影響を実感できることで、人は自らの社会的存在意義を自覚し、主体的に活動することができます。このようなひとり一人の内発的モチベーションによる主体的なアクティビティが、地域をつくり、そして社会全体をつくるドライビングフォースとなります。つまり“地域”こそが、社会をつくる基盤であると同時に、社会全体をつくる原動力として、大きな可能性を秘めているのです。

そもそも「科学」の本質は観察からはじまります。対象に直接触れ、自分の目で見て、自己と対象との関係性を五感で感じることにし、知的好奇心・論理的思考力が養われることはありません。「科学」と言うと「科学は専門家だけが知っていればよい」と自己と科学との関係性を認識しようとし、ない風潮や、または成果ばかりが目立ちはじめますが、そこに至るまでのプロセスにこそ、知的好奇心や論理的思考力をはじめとする、科学的なものの見方・考え方、すなわち自己と対象との関係性を構築する姿勢が隠されています。

natural science では、知的好奇心をもたらす心豊かな社会の創造にむけて、「科学」を切り口に、自己と対象との関係性の可視化・再構築の場として機能することを「科学で地域づくり」と位置づけ、日々の科学教育プログラムの開発・実施のほか、大学・研究機関や企業、行政・教育機関等と連携し、2007年から毎年、体験型科学イベント『学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ』を開催しています。『学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ』は、「科学って、そもそもなんだろう？」をテーマに、製品や成果等の“結果”だけでなく、科学や技術の“プロセス”を五感で感じられる場づくりを通じて、子どもから大人まで、各人各様の感じ方から自己と対象との関係性を可視化・再構築する場として機能することを目指すものです。

そもそも人間は生まれながらにして知ることを欲する存在です。そして生まれた創造物が共有されることは喜びです。この認識に立つ時、科学は人の本性に根ざすものとなり万人のものとなるでしょう。こうした共感の輪を生み出す循環こそが、人間の本来持つ内発的モチベーションがさらに発揮され、次、その次に登場する科学や技術が継続的に生み出され、わたしたちの心豊かな社会が達成されていく土壌となるはずで

知的好奇心をもたらす心豊かな社会の創造に資することを願い、今年も『学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ』を開催いたします。皆さまのご理解・ご協力・ご参加を、心よりお待ちしております。

特定非営利活動法人 natural science

サイエンスデイ2018

- > 開催主旨
- > 企画概要
- > 開催概要
- > 応援メッセージ
- > 2018出展プログラム
- > サイエンスデイAWARD 2018
- > サイエンスデイAWARD2018
- > 会場アクセス
- > 出展案内・出展申込

アーカイブ

- > 2017
- > 2016
- > 2015
- > 2014
- > 2013
- > 2012
- > 2011
- > 2010
- > 2009
- > 2008
- > 2007

[http://www.science-day.com/?page_id=874\[2018/06/19 22:15:44\]](http://www.science-day.com/?page_id=874[2018/06/19 22:15:44])

企画概要

科学のプロセスを子どもから大人まで五感で感じる日

社会の成熟化に伴い、科学や技術はブラックボックス化し、わたしたちは便利さと引き換えに、科学や技術の“プロセス”を五感で感じる機会を失ってきました。しかしながら、科学や技術のみならず“結果”のみを一方向的に享受するだけの姿勢では、科学離れや科学リテラシー不足などの社会的リスクを回避することはできません。

一方で、ここ仙台・宮城は、「科学」という切り口で見ると、大学・研究機関、民間企業や行政・教育機関等が密集し、研究者や技術者等が日々研究・開発等の活動を行い、わたしたち市民の生活と科学・技術が隣り合わせで存在する、古くから「学都」と呼ばれる地域です。

この地域の特性を活かし、「科学って、そもそもなんだろう？」をテーマに、大人も子どもも、普段科学に触れている人も触れていない人も、科学や技術の背景にある“人”や“プロセス”を自らの五感で感じられる場として、『学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ』を毎年開催します。

『学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ』は、「科学」を切り口に地域を再発見し、関係性再構築の場として機能することで、知的好奇心がもたらす心豊かな社会の創造に資することを目指します。



五色のサイエンスの文字は、「五感で感じる」と「科学の多面性」を表しています。また黒箱は、「ブラックボックスを開けること」と「多様な主体が一室に集う場」を表しています。

ステップと期待する効果

第1フェーズ
(2007年～)

学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ 科学のプロセスの多様性を可視化し再発見する

ステップ① 科学の“プロセス”を体験

各出展団体の現場の“人”が「おもしろい」と思う“プロセス”を形にした体験型プログラムを通じて、普段なかなか実感できない“プロセス”を体験することで、子どもから大人まで各人各様の感じ方から自然な形で興味・関心が喚起される。



ステップ② 研究者や技術者等の現場の“人”との対話

喚起された興味・関心は各人 各様であり、それぞれの人が「知りたい」と思うところから、研究者や技術者等の現場の“人”との対話を通じて、各自が興味・関心を深めることができる。



ステップ③ 生活の中で関連事項と遭遇

本企画は地域資源で構成されているため、本企画終了後も、市民が普段の生活の中で関連事項と遭遇する機会は多い。これまで何気なく利用していた製品や成果等の“結果”を見ても、本企画をきっかけに“プロセス”があることを想像でき、興味・関心が継続し、身近に感じられる効果が期待される。

ステップ④ 年間を通じた科学イベントへの参加

本企画の“見本市”的な特徴を活かし、「学都仙台・宮城サイエンスコミュニティ」会員登録により、各出展団体が開催する一般向け科学イベント（一般公開や市民向け講座など）情報を市民へ直接的・継続的に配信できるシステムをつくることで、年間を通じて市民が科学に触れられる機会を増やす。



ステップ⑤ 毎年恒例イベントとして参加

毎年開催により認知度は高まりつつあるが、今後も地道に連携機関を増やし、地域の毎年恒例イベントとして定着化を図ることで、科学・技術に興味・関心のある人から、普段は科学イベントにあまり参加しない人まで、幅広い層が科学・技



術を楽しむことができる場を地域に創出していく。

第2フェーズ
(2011年～)

サイエンス・デイAWARD 科学のプロセスの価値を複眼的に評価し合う

ステップ⑥ お互いに応援し合うコミュニティへ

各主体の取組みについて、各主体や市民がお互いに応援し合ったり、表彰し合えるしくみ（サイエンスデイAWARD等）をつくることで、相互理解を深めながら誰もが主体的に科学に参加できる持続可能な『学都「仙台・宮城」サイエンスコミュニティ』の構築を目指していく。



第3フェーズ
(2016年～)

サイエンス・デイ オブ ザ イヤー 科学と社会をつなぐよい方法論を共有する
(2017年度：文部科学大臣賞、JST理事長賞、宮城県知事賞、仙台市長賞)

ステップ⑦ 科学と社会をつなぐ優れた方法論を共有

サイエンス・デイ オブ ザ イヤーの審査を通じて、科学と社会をつなぐ優れた方法論を発見し、地域で共有化するしくみをつくることで、次なる創造へとつなげていく。



今年の新しいポイント

☑ 既存の科学コミュニケーション活動の**効果最大化**

- サイエンス・デイのチラシ裏面に、科学イベント情報を掲載できます
(県内の全公立小中学校並びに出展高校等に約23万部を学校配布予定)

今年下半期に開催される科学イベント情報を一元的にまとめた『学都「仙台・宮城」サイエンスマップ～科学イベント編～』を、今年度もサイエンス・デイのチラシ裏面（県内の全公立小・中学校及び出展高校等に全児童・生徒分の約23万部を6月下旬～配布予定）を活用して作成し、学校配布します。科学イベント情報掲載ご希望の方は、natural science までご連絡ください。



学都「仙台・宮城」サイエンスマップ

- 科学イベント情報告知・申込・受付自動化システムを利用できます
(学都「仙台・宮城」サイエンスコミュニティ会員：約1万2千人)

『学都「仙台・宮城」サイエンスコミュニティ』の個人会員（約1万2千人）むけに、各団体が年間を通じて開催している科学イベント情報を告知し、申込・受付を自動化できるWebシステムを利用できます（無料）。ご希望の方は、[本コミュニティのWebサイト](#)からお申し込みください。



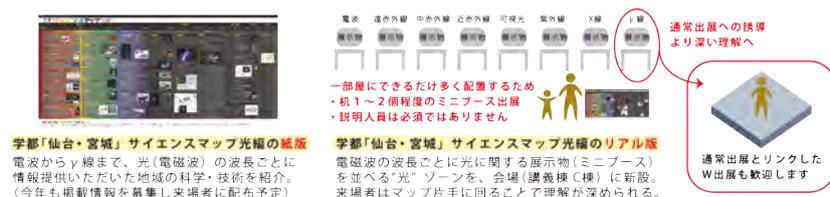
学都「仙台・宮城」サイエンスコミュニティ <http://science-community.jp>

☑ 『学都「仙台・宮城」サイエンスマップ光編』の紙版に加えて**リアル版も募集**

- 「光」ゾーンを新たに設けて**“光”に関するミニブース出展**を募集し、光の波長ごとに並べる今年初の試み

サイエンス・デイでは、「科学・技術の地産地消」と銘打ち、地域の多様な科学のプロセスを可視化・共有化できる場づくりの一環として、非専門家でも科学・技術を俯瞰しより深く理解できる方法論の開発・実践に取り組んでいます。2014年度からは、“光（電磁波）”を切り口に、地域の科学・技術を可視化する『学都

「仙台・宮城」サイエンスマップ光編』を毎年作成し、サイエンス・デイ来場者並びに関係各位から好評いただいております。さらにサイエンス・デイ2018では新たな試みとして、より深い理解へと導く場づくりを目指し、『学都「仙台・宮城」サイエンスマップ光編』を実際に五感で体験できる“リアル版”として、“光”に関するミニ出展ブースを募集します。光速 (c) にかけて会場の講義棟C棟1階（来場者数が最も多いエリア）に“光”ゾーンを新設し、電磁波の波長ごとに光に関する展示品を並べる予定です。来場者は『学都「仙台・宮城」サイエンスマップ光編』を片手に、“光”ゾーンをまわることで、より理解を深めていただくという趣向です。なお、本企画については、一部屋になるべく多くの“光”に関する展示品を並べることで俯瞰した理解をねらいとするため、1出展あたりの展示スペースは机1、2個程と小さく、説明人員も必須ではありません。通常出展とリンクしたW出展もより深い理解につながるため歓迎します。光に関わる研究・開発をされている方はぜひお申込みください。



サイエンス・デイ オブ ザ イヤー（文部科学大臣表彰等を予定）
～ 科学と社会をつなぐよい方法論の発見と共有化～

● 「サイエンス・デイ オブ ザ イヤー」審査は今年から**事前エントリー**が必要に

サイエンス・デイでは、科学・技術を社会・一般に伝える内容と方法が画期的でありかつ他の分野や組織での応用・展開が十分期待できるサイエンス・デイ出展内容を審査し表彰する「サイエンス・デイ オブ ザ イヤー」を2016年度から始めています。さらに、2018年度からは「科学と社会をつなぐよい方法論を共有する仕組みづくり」をさらに具現化すべく、出展団体がその方法論を競い合うコンテスト形式の「サイエンス・デイ オブ ザ イヤー」（文部科学大臣表彰等を予定）にバージョンアップします。それに伴い、「サイエンス・デイ オブ ザ イヤー」の審査対象となるため



には、全出展者が審査対象となった2017年度までとは異なり、通常の出展申込とは別に専用の申込が必要となりました。エントリーする方は出展申込書の項目にチェック後、審査員提出用の企画概要（科学を社会に伝えるためにどのような工夫をしているかを中心に）をWordファイル（図や写真付。形式やページ数は任意）で、6月29日（金）までにメールで提出してください（宛先：info@natural-science.or.jp）。

開催概要

名 称 ①学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ 2018
②サイエンスデイAWARD2018表彰式・交流パーティー
③サイエンス・デイ オブ ザ イヤー-2018 表彰式

日 時 ①2018年7月15日（日）9:00～16:00
②2018年7月20日（金）予定
③2018年8月中旬で調整中

会 場 ①【メイン】東北大学川内北キャンパス 講義棟（仙台市青葉区川内41）
【サテライト】東北大学工学研究科・工学部サイエンスキャンパス
②調整中
③調整中

会場となる東北大学内に、駐車場はございません。
路上駐車場及び周辺施設への駐車は、固くお断りいたします。
ご来場の際には、公共交通機関をご利用ください。

アクセス [仙台駅からのアクセス](#)

主 催 特定非営利活動法人 natural science（2007年6月設立）

共 催	準備中
協 賛	準備中
後 援	準備中
入 場 料	無料
来場対象	こどもからおとなまでどなたでも
来場見込	約10,000人（2017年実績：10,580人）
出展費用	無料（ただし出展に関わるその他の費用はご負担下さい）
出展募集	講座プログラム型：約40プログラム、体験ブース型：約60ブース
お問合せ	特定非営利活動法人 natural science 事務局 大草芳江 〒980-0023 仙台市青葉区北目町4-7 HSGビル7階 Five Bridge 内 Tel.022-721-2035 URL http://www.natural-science.or.jp/ お問合せフォームはこちら
備 考	本イベントは学都「仙台・宮城」サイエンスコミュニティ（JST科学技術コミュニケーション推進事業「ネットワーク形成地域型」平成25年度～平成27年度採択事業、提案期間：宮城県、運営機関：特定非営利活動法人 natural science）の土壌づくりの一環として開催されています。

「情報処理学会東北支部」ブースの様子

サイエンスデイ 2017（2017.7.16（日），東北大学川内北キャンパス）



情報処理学会東北支部 平成30年度予算

収入	2017年度		2018年度
	予算	決算	予算
本部からの繰入相当額	1,987,000	1,987,000	1,974,000
支部交付金相当額	1,987,000	1,987,000	1,974,000
記念事業支援金相当額	0	0	0
ジュニア会員向けイベント補助			
事業収入	0	0	0
支部大会	0	0	0
講演会	0	0	0
研究会	0	0	0
連合大会	0	0	0
補助金収入	50,000	50,000	50,000
(財)仙台応用情報科学研究振興財団より寄付金	50,000	50,000	50,000
雑収入(利息等)	20	0	0
当期収入合計(A)	2,037,020	2,037,000	2,024,000

支出	2017年度		2018年度
	予算	決算	予算
事業費	1,520,000	1,460,050	1,610,000
支部表彰	350,000	326,498	300,000
講演会	350,000	240,932	330,000
研究会	360,000	256,900	320,000
連合大会(分担金)	310,000	310,000	310,000
セミナー・会議支援	150,000	241,370	200,000
アウトリーチ活動	0	84,350	150,000
管理費	517,020	170,732	414,000
評議員会・幹事会	170,000	82,732	150,000
総会	90,000	59,200	100,000
事務委託費	240,000	28,800	150,000
雑費	17,020	0	14,000
予備費等(任意)	0	0	0
当期支出合計(C)	2,037,020	1,630,782	2,024,000
当期収支差額(A-C)	0	406,218	0

2017 年度 事業報告

1. 概況および重点活動

IoT (Internet of Things) , ビッグデータ, 人工知能(AI)が社会の注目を集め, これからの未来を大きく変えようとする現在, 本会の果たすべき役割はますます広がっている。これまで学会の抜本的改革を継続的に推進してきたが, 正会員の減少傾向に歯止めをかけるには至らず, 個人会員数は減少となった。引き続き会員数減の要因分析と検討を進めるとともに, 新たな活動のための中長期計画の具体化・学会システムの刷新ロードマップの策定などが進みつつある。調査研究活動, 学会誌の発行, 論文誌編集活動, 学術講習会の開催, 標準化活動においても, 新たな取り組みに挑戦しつつ, 例年通りの成果を上げている。財務的には, 正会員費改定に加え種々のコスト削減の施策を行い, 今年度黒字を達成した。また, 会員サービスを中心とするこれまでの学会の在り方を補完する, 新たな取り組みの検討を開始した。社会に対して本会の専門性を還元するため, イベント企画を推進し本会会員だけでなく一般の方々に開けた活動とし ICT 技術の価値を発信する。ICT 技術の使い手である他学会や企業との連携を実現し, 技術に対する健全なフィードバックを得る。本会はこれらを通じて社会から信頼される ICT 技術のリーダーシップを確立していきたい。この活動を IPSJ イニシアティブと呼んで, 長期戦略担当理事を中心に関連する委員会の協力を得て議論を進めている。

特筆すべき改革や成果としては, 下記のものあげられる。

- 継続的な学会運営と財務基盤の安定のために前年度10月の臨時総会決議により27年間据え置かれてきた正会員年会費を値上げした。また, ジュニア会員制度を周知する為に, 支部のジュニア会員向けイベント支援やパンフレット改定と新たな団体への配布, ジュニア会員募集期間延長等の施策により, ジュニア会員制度創設以来最高の782名を達成した。
- 実務家・ITエンジニア向け新サービスである認定情報技術者制度(CITP)において, IFIP IP3の審査を受け認定された(認定日:2018年2月26日)。認定情報技術者は新たに768名誕生し, 累計で7,405名を認定した。また新たに1社の社内資格制度を認定し, 認定した企業は累計で8社となった。(注:IP3: International Professional Practice Partnership)
- 長期戦略理事が中心となり, 本会の新たな取り組みであるIPSJイニシアティブに向けて, その候補キーワードの議論を開始し, 学会のハブ機能強化については推進する計画案を検討した。
- 女性会員増への取り組みとして, 女性会員の活躍を支援するInfo-WorkPlace委員会において, 女性会員のネットワーク構築のためのWebサイト立ち上げ, SNSでの情報発信, メーリングリストの整備をすすめた。また, 関連イベントへの積極的な共催参加, 従来の全国大会に加えFIT2017での自主イベント企画などを通じ広報と会員の意識向上に努めた。
- 新世代企画委員会における若手の活発な取り組みを続け, ニコニコ動画との連携, 全国大会での「IPSJ-ONE」, 学会イベント受付のオンライン化, 勉強会フォーラム等の取り組みを推進した。また, ジュニア会員向けサービスの企画を開始した。
- 学会情報システムの刷新に向けた現状調査を実施するとともに, イベント・シンポジウム・支部・研究会のシステムの統合も含めたロードマップを策定した。現行システムの集約だけでなく業務フロー自体の見直し/簡略化を進め, 新規システムの構築の具体的なスケジュールを策定し, システム改版作業を進めている。2016年度に策定したロードマップに従い, 2017年度は学会システムの開発スケジュール立案と開発先選定を行った。2018年度は稼働開始と移行作業に充てる予定である。

- 本会の専門性を社会に還元する活動の一環として、文部科学省委託事業「先導的・大学改革推進委託事業（超スマート社会における情報教育の在り方に関する調査研究）」ならびに、大阪大学からの再委託事業として文部科学省委託事業「情報学的アプローチによる「情報科」大学入学者選抜における評価手法の研究開発」の一部を受託した。

この他にも、グローバル化を目指した取り組み、査読システムのリニューアル、電子図書館のサイトライセンスサービス、国の政策や方針に対する活発なパブリックコメントの発信、国内外学会との連携などで多くの成果が出始めている。

また、今年度内閣府への申請手続きを進めていた公益目的支出計画完了予定年月日変更申請について認可された（従前 2018 年 3 月 31 日から 2020 年 3 月 31 日に変更）。

1.1 学会運営体制の充実および財政基盤の強化

急激に変化する環境の中で、学会を安定的に運営しつつ、これを発展させるために、学会としてのトラディショナルな活動は今までどおり大切にしつつ、新しいアイデアを積極的に取り入れて、学会を柔軟に改革できる運営体制の整備として下記の施策を進めた。

- ① 学会価値の向上による会員増と財政基盤の強化に取り組む。学生会員 2,700 名とジュニア会員 1,000 名を目指し、支部における若手会員向け新規イベント企画や高専への学会紹介などを行い、結果前年度、前々年度と 500 名強の減少幅を約 200 名の減少にまで縮小することができた。
- ② 学会の新ビジョンの検討を進めた。具体的には、IPJS イニシアティブとして採択すべきキーワードを国内外の動向情勢を俯瞰し収集し、学会としての見識をまとめた。
- ③ 会員サービスの向上、運用コストの削減、セキュリティ対策の強化等を目標に学会システムのリニューアルについては、2018 年度内の運用開始を目指し、2017 年度に開発に着手した。
- ④ 学会システム刷新にあわせ、事務局の複雑な業務フローの簡素化を検討し、会員向けマイページでリアルタイム決済を行うなど学会システムによる自動化を可能にする目途がたった。
- ⑤ 長期戦略理事を中心に中長期戦略を維持発展させ、産学マッチングを容易にする学会ハブ機能の強化、学会のビジネスモデル転換など諸課題に向けた方策を調査研究/企画政策委員会で検討した。
- ⑥ 新世代企画委員会活動では、会誌とも連携し「IPJS 先生、質問です（仮題）」コーナーの具体化等若手向け活動を推進した。
- ⑦ アドバイザリーボードからの「情報処理学会が目指すところの明確化」提言をうけ、学術で先端をリードしていくイニシアティブ活動、学界/産業界ハブ機能となるべく、長期戦略で検討した。
- ⑧ 会員数の増加を図る為にジュニア会員向けサービス拡充や入会期間延長などを行った。

1.2 学生・若手研究者育成のための活動および体制強化

- ① 新世代理事を中心とする横串の組織「新世代企画委員会」活動を推進し、新世代（学生・若手研究者・若手技術者）の発想を学会運営に取り込む活動を推進した。
- ② 小学生から大学学部 3 年生までがオープンに入会申込できる「ジュニア会員制度」を推進し、若い世代の入会を促進した。また、「Exciting Coding! Junior 2017」など、数々のジュニア会員向けイベントを開催・共催した。2018 年 3 月末現在ジュニア会員数は 782 名である。
- ③ 研究会や支部などの協力も得て、学生や若手研究者のためのイベントを企画開催した。また、学生や若手を対象とした賞を授与した。

1.3 調査研究活動ならびに提言活動の推進

- ① 学会のコアの活動として、研究会による諸活動を推進した。コンピュータサイエンス領域、情報環境領域、メディア知能情報領域の 3 領域に分けて、領域委員会を 3 回ずつ開催し、研究会間での情報交換

を促した。

- ② 調査研究運営委員会、政策提言委員会、教育委員会が連携し、国の政策および方針に関する「高大接続改革の進捗状況」、「教育職員免許法施行規則および免許状更新講習規則の一部を改正する省令案」などに関するパブリックコメント募集に対して、各専門の研究分野と連携して積極的な提言活動を行った。
- ③ 個々の研究会活動を超えて、領域または調査研究全体による活動を支援するために、調査研究活動の積立資金よりプロジェクト（期間2016年11月1日～2017年10月31日）を募集し、国際会議支援、女性研究者支援、若手研究者支援などの6件（総額92万円）を採択し支援することとした。
- ④ 情報保障の導入を支援するため、アクセシビリティ研究会で実施している文字通訳や手話通訳に対して、調査研究活動の積立資金より50万円を補助した。
- ⑤ 複数の研究会の共催による「DICOMOシンポジウム」、「インタラクション」などを開催した。

1.4 グローバル化

- ① 英文論文誌 Journal of Information Processing（以下、JIP）のインパクトファクタ取得について、諸対応を検討した。JIP編集委員会で、インパクトファクタを持つ他論文誌の状況を共有するとともに、ブレーンストーミングを行い今後の戦略について整理した。
- ② 国際的に広く使われている商用査読管理システム ScholarOne Manuscripts の運用を行い、JIPを中心に査読プロセスをグローバルスタンダードに合致させると同時に、特集号などでの編集会議の自由度を確保するための利用ノウハウの蓄積を進めた。
- ③ 研究会活動を中心に、国際会議の主催や共催を推進した。情報環境領域プロジェクトとして、ACM CHIへの参加費・旅費の援助を行った。
- ④ IEEE や ACM のようなグローバルトップの国際学会との連携（学会員向けサービス等）に加え、若手向け表彰として「IPSJ/IEEE-CS Young Computer Researcher Award」を新設した。
- ⑤ アジア地域の国々との連携の機会を検討し、台湾師範大学でコンピュータと教育に関する研究発表会を行った。
- ⑥ アジアの関連学会である中国 CCF (China Computer Federation) , 韓国 KIISE (Korean Institute of Information Scientists and Engineers) との中長期的な交流に向けて意見交換や相互訪問を行った。国際会議の共催について検討を進めている。

1.5 実務家・ITエンジニア向け活動の強化

- ① 高度IT人材の資格制度である「認定情報技術者（Certified IT Professional：略称 CITP）制度」について、国際的に通用する資格とするために、IFIP IP3の審査を受け認定された（認定日：2018年2月26日）。個人認証においては、資格の更新審査を開始し、2013年度に認定したCITPのうち、8名の資格を更新した。本年度の新たな登録者は768名、新たな認定企業は1社で、年度末時点の累計で、認定したCITPは7,405名、認定企業8社となった。
- ② ソフトウェアジャパン、デジタルプラクティス、連続セミナー・短期集中セミナー、ITフォーラムなど、各種の実務家・ITエンジニア向け活動を通じて集客に貢献した。
- ③ 情報処理推進機構（IPA）、情報サービス産業協会（JISA）、日本情報システム・ユーザー協会（JUAS）、電子情報技術産業協会（JEITA）、科学技術振興機構（JST）、先端IT活用推進コンソーシアム（AITC）などの実務家・ITエンジニアを対象とする団体との連携をさらに深め、共同イベントの開催などを推進した。

1.6 教育活動の充実

初等中等教育、専門学校そして大学などにおける情報教育、および企業の技術者を対象とした教育プログラムの推進に向けて、以下の施策を実施した。

- ① J17-CS, J17-IS, J17-CE, J17-SE, J17-IT の情報専門学科用カリキュラム標準を策定した。併せて、一般情報教育用カリキュラム標準 J17-GE も策定した。
- ② 大阪大学から再委託され実施している「情報学的アプローチによる「情報科」大学入学者選抜における評価手法の研究開発」について以下の事を行った。
 - ・「情報科」入試実施における情報科での「思考力・判断力・表現力」評価手法の検討
 - ・「知識・技能」＋「思考力・判断力・表現力」を評価するための本格的 CBT 試行システムの構築
 - ・「情報科」大学入学者選抜に関するシンポジウムや大会セッションなどの広報活動
- ③ アクレディテーション活動（教育機関における技術者教育プログラムの認定、JABEE からの委託、国際水準を目指して教育改善を推進しソウル協定の活動に協力）を継続した。
- ④ 高校教科「情報」の教員免許更新講習会の開催および教育シンポジウム・ワークショップ・コンテストの運営と後援を実施した。
- ⑤ 情報プレースメントテスト（IPTS : Information Placement Test System）の開発と実施に、高大接続の一環として協力した。プレテストの実施、結果の分析、本番用のテスト問題作成と e-learning プラットフォームへの実装を行った。

1.7 会員サービスおよび広報の充実

- ① コンテンツの新しいサービス提供形態として、従来ダウンロードが必要だった刊行物のhtml提供を開始、デジタルプラクティスではアクセス数が4倍以上となった。
- ② 2014年度に提携したドワンゴ社のニコニコ動画配信は継続し、Info-workplace委員会でのオンライン読書会放送など利用を拡大した。
- ③ 研究会の非会員参加者のトラッキングや広報のために、イベント・シンポジウム等申込サイトの外部サービス利用をユビキタスコンピューティングシステム研究会などで検討した。
- ④ 学会システム開発を優先するため、最新 CMS（Contents Management System）を採用した研究会・支部システム用共通基盤の試行は 2018 年度以降に延期した。

1.8 学会システムの移行

業務フロー、制度の見直しによる業務の簡略化（開発費、運用費軽減、人件費節約、マイページ作成によるサービスの向上）および、セキュリティ強化も目指した。また、新規システム構築の具体的なスケジュールを策定し、クラウド型（SaaS, ASP型）の新学会情報システムを選定し、2018年度のサービス開始を目標に、入会・マイページ・各種申込・各種決済・会員管理・研究会管理・行事管理・集計・台帳出力等の機能について開発を進めている。各支部と協議し、支部が運営するWebサイトに関して、第一段階としてISPの統一とセキュリティ強化を行い、第二段階で共通プラットフォームとCMSの構築を行う等、8支部サイトの統合化を検討するという方針で合意した。

2018年度 事業計画書

1. 概況および重点活動

第5期科学技術基本計画(2016.1.22)において『近年、情報通信技術（ICT）の急激な進化により、グローバルな環境において、情報、人、組織、物流、金融など、あらゆる「もの」が瞬時に結び付き、相互に影響を及ぼし合う新たな状況が生まれてきている。』とある通り、情報処理技術の適用領域はかつて無い速度で広がっている。このような情報処理分野における技術イノベーションをリードする立場として、本会の果たすべき役割はますます拡大し、それに対応する為にこれまで進めてきた学会の改革に加え、新たな学会価値向上への取り組みに着手する。

以下の三つの柱で更なる学会の価値向上を図る。第一は学生・若手研究者育成のための活動および体制強化として主にジュニア会員向けの各委員会のイベント/教育等のこれまでの活動を更に発展させる。また、ITエンジニア向けには、主に前年度 IFIP IP3 の認定を得た認定情報技術者制度（CITP）の更なる活性化、各種イベント、セミナー等の充実を図り、それらの相乗効果によって、会員サービスの向上を目指すと共に本会が日本の成長に資する役割を拡大する。第二は前年度より開発に着手した学会システムのリニューアルを推進し本年度内にサービスを開始、会員サービスの向上を図る。第三はグローバル化の推進として、英文論文誌（JIP）のインパクトファクタ取得再申請に向けた継続的な取り組みや、海外学協会（欧米の他アジアパシフィック等）との連携を推進する。また、2016年度より検討を進めている「IPSJ イニシアティブ」についても、企画政策委員会（長期戦略理事）を中心に更に議論を深めていく。

学会のコアの活動としては、調査研究活動では、新たな研究領域開拓や、国際会議の主催等グローバル化も推進する。教育活動では、情報専門系カリキュラム標準(J17)の普及やアクレディテーション活動、教員免許講習会・シンポジウム開催などを推進する。会誌については、話題性の高い解説記事提供等により「読まれる会誌」をめざし、デジタルプラクティス、論文誌との連携を更に強化していく。

具体的には、学会運営体制の充実および財政基盤の強化を基本として、更に下記に示す重点活動項目の活動を通じて会員サービスの向上を図ると共に本会が社会に提供する価値拡大に寄与する。

1.1 学会運営体制の充実および財政基盤の強化

急激に変化する環境の中で、学会を安定的に運営しつつ、これを発展させるためには、学会としてのトラディショナルな活動は今までどおり大切にしつつ、新しいアイデアを積極的に取り入れて、学会を柔軟に改革できる運営体制が必要である。このため、下記の施策を実施する。

- ① 学会価値の向上による会員増と財政基盤の強化に取組み、会員数減少幅の縮小を目指す。
- ② 学会の新ビジョンの検討を進めている。2002年度より「実務の焦点」と「学術の焦点」の2焦点をもつ楕円構造モデルに基づき、IT エンジニア向け活動を行ってきた。しかし、昨今の情報処理技術の社会影響力増大と発展スピードの加速をうけ、2焦点を更に協調/深化させたものを目指す。
- ③ 会員サービスの向上、運用コストの削減、セキュリティ対策の強化等を目標に学会システムのリニューアルを前年度より推進中で、2018年度内にサービスを開始する。
- ④ 学会システム刷新にあわせ会員サービス拡充と事務局の複雑な業務フローの簡素化を検討する。
- ⑤ 長期戦略理事を中心に、中長期戦略提言の実現に向けた IPSJ イニシアティブの継続検討、ならびに学会ハブ機能の強化、学会のビジネスモデル転換などの諸課題について検討をすすめる。
- ⑥ 新世代企画委員会活動を推進し、そこから生まれた新たなチャネルの活用とともに既存の枠組みを活用し学会の成果を社会に還元する開かれた活動を推進する。
- ⑦ 第三者機関であるアドバイザーボードからの提言を適宜諸事業へ反映する。

- ⑧ 財務状況の見える化を図るとともにジュニア会員制度を定着・活用し会員数の増加を図り健全な法人運営を行う。

1.2 学生・若手研究者育成のための活動および体制強化

- ① 新世代理事を中心とする横串の組織「新世代企画委員会」活動を推進し、新世代（学生・若手研究者・若手技術者）の発想を学会運営に取り込む。
- ② 小中高校生，高専生，大学学部1～3年生を対象とする会費無料の「ジュニア会員制度」を活用し，学生・生徒の育成を支援するとともに，学部4年生以降における有料会員への移行・学会活動の継続を促進する。若いIT人材を育成し日本の将来の成長に資する。
- ③ 研究会や支部などの協力も得て，学生や若手研究者，ジュニア会員のためのイベントを企画開催する。

1.3 ITエンジニア向け活動の強化

- ① 認定情報技術者（Certified IT Professional：略称 CITP）制度について，IFIP IP3 からの認定に伴いCITPの認知度を向上させ，2018年度は累計認定者数9,000人規模を目指す。ITSS レベル5に対応する資格の検討を進める。また，CITP コミュニティの更なる活性化を目指す。
- ② ソフトウェアジャパン，デジタルプラクティス，連続セミナー・短期集中セミナー，IT フォーラムなどにより，IT エンジニアの育成に貢献するとともに，会員増，収入増を図る。具体的にはメーリングリストやフォーラムなど，CITP の交流・発表の基盤の拡大を進め，コミュニティへの参加を促し，活性化を図る。また会誌を含め多様な媒体を駆使して活動を紹介し，利用者の増加を図る。デジタルプラクティスに関しては，学会事業への貢献を定量的に測定するためのKPI（投稿数，購読数など）を計測すると共に，着実に経費の削減を図る。また，その達成のために，CITP や IT フォーラム・研究会との連携，読みやすさの向上と各種PRの施策を具体化し立案，実行する。
- ③ 情報処理推進機構（IPA），情報サービス産業協会（JISA），日本情報システム・ユーザー協会（JUAS），科学技術振興機構（JST），先端IT活用推進コンソーシアム（AITC），電子情報技術産業協会（JEITA），モバイルコンピューティング推進コンソーシアム（MCPC），一般社団法人情報通信技術委員会（TTC），インターネット協会（IAJ）などのITエンジニアを対象とする団体や企業との連携をさらに深め，共同イベントの開催などを推進して，会員増に貢献する。

1.4 会員サービスおよび広報の充実

会員サービスの向上および広報宣伝の充実のための諸施策を企画し，会員の目線で，魅力ある学会作りを目指し，必要に応じて会員制度の見直しも検討する。具体的には下記の項目を実施する。

- ① オンライン刊行物の新しいビジネスモデルの推進，マルチメディアコンテンツ配信などの新しいサービス提供形態を推進する。
- ② 2014年度に提携したドワンゴ社のニコニコ動画配信は継続し，強化を図る。
- ③ 会員のアクティビティの電子的な記録を収集するため，イベント・シンポジウム等申込サイトの試行を継続する。
- ④ 上記①を実現するために，研究会・支部システム拡充の検討に着手する。

1.5 学会システムの拡充

クラウド型（SaaS，ASP型）新学会情報システムへの移行作業を行い，2018年度内にサービスを開始する。これによって，セキュリティ強化を図るとともに，会員サービスの向上と業務効率の改善を実現する。各種サービスの申請および登録者の種別に応じた登録料（年会費）の支払をユーザがマイページを介して行えるようにする。また，支部が運営するWebサイトにおけるISPの統一とセキュリティ強化を行う。その後，共通プラットフォームとCMSの構築を行う等，8支部サイトの統合化を検討する。

1.6 グローバル化

- ① 英文論文誌 Journal of Information Processing (以下, JIP) のインパクトファクタ取得の再申請を目指す。そのために論文の Citation 増の方策を検討し, arXiv といったパブリックなプレプリント・サーバーを活用して JIP 論文のビジビリティ向上を図るなど, 可能なものから実施する。
- ② JIP を中心に, 査読プロセスの一部をグローバルスタンダードに合致させてきた。特集号, 国際会議連携などの自由度を持つことの重要性も考慮しつつ, 査読管理システム ScholarOne Manuscripts が適切かつ効率的に利用できるようマニュアルなどを整備する。
- ③ 研究会活動を中心に, 国際会議を積極的に主催するとともに, 海外学協会との連携を推進する。
- ④ IEEE や ACM 等のグローバルトップの国際学会活動を参考にして, 学会のグローバル運営戦略を検討し, これを実施する。
- ⑤ アジアの関連学会である中国 CCF (China Computer Federation), 韓国 KIISE (Korean Institute of Information Scientists and Engineers) と中長期的な CJK 連携の強化活動を加速し, 国際会議の合同開催等を企画する。
- ⑥ 日本に留学生を多く輩出している中国や他のアジア地域などの国々との連携の機会を検討し, 人的交流を含めた活動を実施する。

1.7 調査研究活動ならびに提言活動の推進

- ① 学会のコアの活動として, 研究会による諸活動を推進する。
 - ・研究会活動を通じた学生会員獲得
 - ・研究コミュニティの持続的発展を推進するための体制構築
 - ・研究会資料におけるマルチメディアコンテンツ取扱いに向けた検討の継続
- ② 調査研究運営委員会, 政策提言委員会, 若手研究者の会が連携し,
 - ・長期的な研究のグランドデザインやロードマップに関する議論の継続
 - ・国の政策および方針に関する各研究分野の積極的な提言活動の推進などを通じて, 国および関連機関から「頼られ&相談される学会」を目指す。
- ③ 積立資金によるプロジェクトを募集し, 個々の研究会活動を超えて, 領域または調査研究全体による国際会議支援, 女性研究者支援の活動を活性化する。また, 研究会毎の財務の透明化を図り, 適切な管理費負担を行う。
- ④ 現在の調査研究活動における研究会やシンポジウムの機会を活用し, 異なる領域を統合する新たな研究領域開拓のための取り組み, および, それらを社会へ発信する活動を検討する。

1.8 教育活動の充実

初等中等教育, 専門学校そして大学などにおける情報教育, および企業の技術者を対象とした教育プログラムの推進に向けて, 以下の施策を実施する。

- ① J17-SE の普及活動: 完成した J17 を本会ソフトウェア工学研究会, 電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会などの研究会や, 本会, ソフトウェア科学会などの全国大会などで発表を行い, その普及を図る。また, いろいろなコメントを蓄積し, 次回の改定への情報収集を行う。J17-CS の調整(改訂)および評価: 2017年度に作成した J17-CS の調整をし, 参照基準との対応などの評価を行う。J17-CS カリキュラムの普及活動: 全国大会イベントなどを通じて, J17-CS を公表する。
- ② 「情報科」入試実施における評価手法の検討としては, 次期学習指導要領を加味した知識体系の整理, 情報科での「思考力・判断力・表現力」評価手法の検討を継続して行ない, 模擬試験の作問, 模擬試験の実施の支援, 模擬試験の採点を行う。
- ③ アクレディテーション活動(教育機関における技術者教育プログラムの認定, JABEE からの委託, 国際水準を目指して教育改善を推進しソウル協定の活動に協力)を継続する。
- ④ 高校教科「情報」の教員免許更新講習会の開催および教育シンポジウム・ワークショップ・コンテス

トの運営と後援を実施する。

- ⑤ ソフトウェア工学教育の国際化に関して：ソフトウェア工学教育に関する国際会議の動向を調べ、日本のプレゼンスを高めるために、積極的に J17-SE の投稿を行い、参加するとともに、日本での開催の可能性を探る。
- ⑥ 広報活動としては、「情報科」大学入学者選抜に関するシンポジウムや全国大会などでのイベントを企画する。
- ⑦ 今後の情報教育全般に関して、より大きな視点からテーマ（Data Science 等）を議論するために、別途 WG を立ち上げる。

特別講演会（工学セミナー）のご案内

日時：平成30年6月20日（水）14:40～16:10

会場：東北大学工学部電子情報システム・応物系 101 大講義室

講師：板屋 一嗣 氏

（株式会社 NTT データ 技術革新統括本部技術開発本部
企画部 VISTECH 推進室 課長）

演題：技術革新が導くデジタル社会の将来展望

— NTT DATA Technology Foresight 2018 —

